

第五部

ふるさとの復興に寄せて

地震後いち早く支援に駆けつけ、「うつく
しいひと」などの映画にも出演した俳優の高
良健吾さん。度々熊本を訪れ、あたたかいエー
ルを送ってくれる女優の宮崎美子さん。「熊
本城が完全復旧するまでは続ける」。ふるさ
と熊本への強い想いを胸に、「くまもと復興映
画祭」を立ち上げ、開催を続けている映画監
督の行定勲さん。復興に向けて、長い道のり
を歩む私たちへエールをいただいた。



地震後に気づいたこと、 築いたことを 未来に繋げる熊本であるように



高良 健吾さん
俳優

これまで九州で地震は何度か経験したことがありますが、熊本でこれだけの大地震が起きた事が信じられませんでした。まずは、祖父母と友達の安否確認。どれだけの被害状況なのか。自分になにができるのか。携帯を片手に、テレビの前から離れませんでした。

発災後は東京から熊本に入った仲間と、現地で被災しながらも共に給水活動をしてくれた方々と行動しました。想像以上にダメージを受けている熊本を見て思う事はたくさんありましたが、実際に地震を体験し、まだ余震が続く熊本に住んでいる方達の事を思うと、僕は動くだけでした。給水活動をしていても、お年寄りと子供達を最優先にし、大切に行っている避難所の人達を目にしました。辛い時にこそ無理に出すユーモアと笑顔。熊本人の特徴ともいえるべき、強がりとかツッコけ。本当は、不安でいっぱいだったと思います。なのに、強くあろうとする心を感じました。この県民性には驚きましたし、感動しました。『熊本出身』ということを誇りに思えましたね。

今回の地震で、傷ついて失ったものもあると思います。だからこそ気付けたこと、築けたことを癒し、繋げていくこと。対地球だからこそその厳しさと美しさを思い出して、この経験を忘れず、忘れさせず、糧にして、未来に残していくことが大事なのだと思います。熊本は、水、魚、肉、野菜、果物のすべてのレベルが高いまま、県内で揃います。海だって、山だって、地球そのままの姿に近い状態で、残っているところもあります。本当に素晴らしいところです。過去から繋げてもらった今を未来にどう繋げていくか。この素晴らしい熊本をどうかずっと大切にしてください。

一人ひとりの顔が見える まちであってほしい



宮崎 美子さん
女優

自分のふるさとが「被災地」と呼ばれる場所になる。このことは、日本に住んでいたら誰にでも可能性があることなのに、どこか他人事のように思っていたのかもしれない。本震のニュースを知つてすぐ、実家の固定電話が繋がらず、携帯電話を持たない母と連絡が取れずにいました。何が起きているのかわからない、これからどうなるのだろうかといった不安ばかりが大きくなり、被災地と呼ばれることの悲しさだったり切なさだったりがかみ上げてきました。たまたま帰省していた近所の幼馴染が実家の母親に声をかけてくれて、近くの避難所へ連れて行ってくれたと後から聞きました。こういう時、頼れるのは「近所さん」しかないのですが、熊本は地域の結びつきがまだしっかりしているんだなと感じました。

本震の3、4日後。仕事で京都に行っていた私は、次の日が休みということもあり、行けるところまで行ってみようと思わず新幹線で博多へ向かいました。とにかく早く帰って、「あの時はこうだったね」という思いを少しでも共有しておかないと、後々、母とわかり合えない部分がでてくるんじゃないかと思ったのです。在来線に乗り換える博多駅や列車の中では、

皆さんとても親切で、とっても静かでした。どうしてもこんなに静かなだろうと逆に怖いくらいでしたが、皆さん、ようやく被害を受け入れて、受け止めて、歩き出している感じだったのでしょうか。その時のことを思い出すと、今でも胸が詰まります。一方で、たどり着いた熊本駅ではおばちゃんが元気よくお土産を売っていてびっくり！ なんだかとても安心したことを覚えています。「元気になれるところから、元気になつていこう」と、とても大事ですよ。

市電の車窓から石垣がひどく崩れ落ちた熊本城の姿を見た時には、「ある、あつてよかった！ 」と、熊本城のありがたさを感じました。RKKの番組の取材で、大天守の外観復旧を特別公開前に見せてもらいましたが、全国からたくさんの方々が支援に来られて一緒に復興にあたっていますね。まだ地震の爪跡が残っていますが、こうやってみんなで頑張っているという姿を多くの方に見てもらえることは非常に画期的なことですし、支援してくださっている皆さんへの恩返しにもなると思います。令和2年春に公開という城内の特別見学通路の完成も楽しみにしています。震災後、仕事でも度々熊本に来る機会を得られたことは、私にとって熊本を応援できることに繋がっています。実際に見聞きしたことを、東京に帰って周りに伝えることもできますし、これから私のできる範囲で応援していきたいです。

災害に強いまちつて、結局人と人との繋がりでしかないですよ。私の母の時のように、日頃からちよつと声をかけてくれるとか、様子を見てくれているとか。都会にはない地域の結びつきが熊本にはある。人が少なすぎても難しいし、人が多すぎても隣の人が誰かわからないという所では無理。そういう意味では、熊本市は良いサイズなのだと思います。今後もし一人ひとりの顔が見える、繋がっている熊本市であつて欲しいと思います。そして、令和元年のスポーツの大きな世界大会のように、様々な人たちがイベントなどを、柔軟に受け入れる拓(ひら)けたまちであつてほしいですね。

映画の力で 熊本を元気にしたい



行定 勲さん
映画監督、演出家、
くまもと復興映画祭ディレクター

「映画の力で熊本を元気にしたい」。その一心で毎年4月に「くまもと復興映画祭」を開催している。この映画祭は震災直後にかわされた熊本市長である大西一史氏との約束から始まった。

2016年の4月、二度の大きな地震に見舞われた熊本。私は本震の前日、FMK『月刊行定勲』の生放送のために熊本入りしていた。放送では余震が続いているので気をつけてくださいと何度もラジオのリスナーに呼びかけた。放送後は、知り合いのレストランでいつものようにスタッフと夕食をとった。そこでの会話は終始これから熊本のために何をしていくべきかだった。ホテルに帰ると0時を過ぎていた。湯船に浸かりたくて私は蛇口をひねってバスタブにお湯を入れた。お湯が溜まるまでの数分間、私はうたた寝をしてしまった。突然、大きな揺れが私を襲った。咄嗟に目を覚ました私は思わずベッドにしがみついた。テレビや電気スタンドが倒れ停電した。暗闇の中で建物 が 軋む音と警報や緊急避難のアナウンスが恐怖を煽った。揺れが収まると私は窓外を覗いた。停電した街は闇に飲み込まれていた。暗がりの空に白い煙が上がって行くの

が見え、何かが崩れ落ちる轟音が聞こえた。ふと風呂の湯を止めていないことを思い出し、スマホの灯りを照らしてバスルームに行くところまで溜まっているはずのお湯が空になっていた。10階から1階まで非常階段で降り、ロビーで配られた毛布にくるまって夜を明かした。明け方、私は街の様子を見に出かけた。店の看板が路上に落ち破片が散乱していた。ショーウィンドウのガラスは割れていた。呆然となった私の足は自然と熊本城に向いた。そこで私が目にしたのは信じられぬ光景だった。熊本大神宮の櫓が倒壊し、付近の路上に大きな石垣の石が転がり道を塞いでいた。美しい弧を描く武者返し石垣は崩れ落ち、その無残な姿が夜明けとともに露わになっていた。熊本城の完全復旧まで20年かかるのだと後に知った。

あまりの惨状にどうすればいいか考えあぐねていると、友人の映画人たちが熊本を舞台に撮った映画『うつくしいひと』を上映してチャリティー募金を集めたらどうかと声を上げてくれた。劇場や自治体や個人によって全国200か所以上で上映され2000万円以上の義援金が集まった。「熊本の美しい風景をありがとう」と映画を観た方たちから感想が寄せられ、「地震によって崩壊してしまった場所が映っていてよかった」と感謝された。映画には記録する力と失った記憶を呼び起こす力があるのだと改めて感じさせられた。やがて復興し、熊本の姿も変わっていく。私が『うつくしいひと』を制作することを決めたのは壊れた街の姿を記録するためと復興の途上で踏ん張った人々の気持ちを記憶するためだった。被災した熊本人の本音をドラマとして描こうと思った。復興に力を注いだ人たちがいたから熊本は創造的な復興を成し遂げたのだと知って欲しくて、未来を生きる熊本の人々に伝えるためにカメラを回した。

私は映画には人を勇気づける力があるのだと信じている。完全なる復興を目指す故郷熊本をこれからも映画の力で盛り上げていこうと思っている。「くまもと復興映画祭」は熊本城が完全復旧するまでは続ける。それが私の天命だと思うからだ。